

校

本

凡 例

本書は現存諸本中善本と考えられる細川家永青文庫蔵「いさよひの日記」を底本とし、同永青文庫蔵、伝幽斎筆本「不知夜記」など、二十八本を対校本として使用し、その本文の異同を示したものである。翻刻にあたっては大凡次の規準に従った。

一、底 本

(1) 本文は底本のまますを活字にうつすことを主眼とし、丁、行、漢字、仮名づかいなどもすべて底本のままとしたが、仮名字体及び漢字の字体は現行のものに改めた。

(2) 底本中の見せ消ちは、その丁の上段に注記した。

(3) 各丁の下段の1から10までの数字は行数を示し、257から309までの数字は朝日新聞社発行の古典全書本の頁数である。

二、対校本

対校資料として用いた諸本は、次の二十八本で、それぞれ上記の略号を用いた。

- | | | | | |
|---|---|----------|-----------|---------|
| 1 | 幽 | 細川家永青文庫蔵 | 伝幽斎筆本 | 「不知夜記」 |
| 2 | 残 | 十六夜日記 | 残月鈔本 | |
| 3 | 群 | 群書類従所収本 | 「いさよひの日記」 | |
| 4 | 林 | 内閣文庫蔵 | 林羅山旧蔵本 | 「十六夜日記」 |

- 5 松 島原侯松平文庫蔵本「十六夜記」
- 6 九 天理図書館蔵 九条家旧蔵本「阿仏記」
- 7 広_甲 広島大学蔵_甲本（寛永十八年写本）
- 8 万 万治二年板本「いさよひの日記」
- 9 学 学習院大学蔵本「不知夜日記」
- 10 竹 天理図書館蔵 竹柏園旧蔵本「いさよひの日記」
- 11 古 古活字本「いさよひの日記」
- 12 静 静嘉堂文庫蔵 松井簡治旧蔵本「伊佐霄記」
- 13 池 東京大学蔵 伝池田光政筆本「阿仏十六夜日記」
- 14 慶 慶応義塾蔵本「以佐霄能記」
- 15 伏 宮内庁書陵部蔵 伏見宮本「かへのうち」
- 16 内 内閣文庫蔵本「不知夜記」
- 17 鈴 静嘉堂文庫蔵 松井簡治旧蔵 鈴木弘恭自筆書入本「阿仏房紀行」
- 18 扶 扶桑拾葉集十二所収本「いさよひの記」
- 19 宮 宮内庁書陵部蔵本「いさよひ日記」
- 20 鷹_甲 宮内庁書陵部蔵 鷹_司（_甲）本「不知霄之記」
- 21 鷹_乙 宮内庁書陵部蔵 鷹_司（_乙）本「いさよひの記」
- 22 尊 尊経閣文庫蔵 中院通勝筆本
- 23 広_乙 広島大学蔵_乙本「いさよひの記」

- 24 三 長崎県立図書館蔵 三宅文庫本「十六夜日記」
- 25 黒 宮内庁書陵部蔵 黒川本「異本十六夜日記」
- 26 岡 岡山大学蔵 池田文庫本「いさよひのにつき」
- 27 天 天理図書館蔵 竹柏園旧蔵本「道の記」
- 28 平 天理図書館蔵 平瀬本「十六夜日記」

三、本文校合の規準はおおむね次の通りとした。

(1) 漢字と仮名、仮名づかい、送り仮名等の異同は原則として示さない。ただしそれにより異義の派生するものは掲げた。なお異義が生じなくても、参考までに掲げたものが、数箇所ある。

(2) 漢字に読仮名を施したものは、原則として示さないことにした。ただし音訓差の異同のあるものについて参考までに示したこともある。

(3) 校合に用いた諸本に存する補入、書入れなどは、その本の筆者が本文の訂正の意図をもって行なったと判断されるものに限って、それによることにした。但し特にその旨をこたわることとはしなかった。ただ岡山大学蔵、池田文庫本に限って朱筆による訂正文本に従った。

(4) 校異の表示は次のようにした。

(イ) 校合箇所は、底本文下の行数をまず示し、その底本文をゴシック体で引用し、その下に―を引き、異同本文を記し、その下の(一)内に、校異本名を略号で示した。諸本の配列は二の掲載番号順とした。また校異本文は、

(一) 内の校異本の最初に記した本の表記に従った。例えば、

④ 枕の―枕さへ(残・群・方・竹・三・岡)―まくら(池)

では、底本四行目の「枕の」は、残月抄本以下六本が「枕さへ」となり(この表記は残月抄本)又同じ箇所が、池

田本では「まくら」となっており、他の諸本は底本通りであることを示す。

なお、底本の本文を対校本が有しないときは「ナシ」と記した。

(四) 空白箇所、判読不能箇所は、その位置を□で示し、後のへにその理由を記した。

(イ) 校異底本文をひく際、それが長文の場合は、その最初と最後だけを記し、中間は…で示した。例えば、
を見て…かき付ておくに―ナシ（広甲・林・古・内・鷹乙）
のようにした。

諸本略解

1 細川家永青文庫蔵本「いさよひの日記」一冊

縦二十五・五糎、横二十・四糎の袋綴の写本で、薄緑の表紙の中央に赤地の紙に「いさよひの日記」と外題を記し、内題はない。前後に遊紙が一枚ずつあり、墨付三十九丁。

此道之記始而一覽之次則借請書写訖」是所雇兼如法師之筆也遂勘校之後以」他本重而読合之者也」慶長第三

曆孟冬廿九日」

幽斎叟玄旨（花押）

の奥書をもつ。これによると、慶長三年十月二十九日、細川幽斎が兼如に書写させたものである。兼如とは兼載の末葉、猪苗代兼如である。この本は書写の時期が明確であると同時に、しかも書写の時期を明記した諸本の中で最も古く、更に幽斎の奥書をもち、本文も特に誤写誤脱などのない善本である。よって影印本をそえ、底本とした次第である。なお影印本は原寸をおよそ〇・八倍から〇・八五倍程度に縮めたものである。

2 細川家永青文庫蔵本「不知夜記」一冊

縦十七糎、横十八糎の綴葉装の写本で箱入り。箱書きに「幽斎様 御筆 不知夜記 一折」とあるが、奥書などはない。金泥流水に水草模様様の表紙の左肩に「不知夜記」と外題を記し、内題はない。墨付四十三丁、遊紙は前に一、後に四、一葉十行書きで一行に十二三から十五六字を書く。和歌は二行に書いている。

3 十六夜日記残月鈔本 三冊

縦二十六・二糎、横十八・七糎の袋綴の板本。本文は万治二年板本を底本とし、岡山少将光政朝臣自筆本、金吾中納言秀秋卿自筆本、西院伊村所藏古写本、扶桑拾葉集所収本、群書類従所収本、松の舎所藏古写本によって校合したというものである。詳細な注釈書で、第一、第二巻は小山田与清、第三巻はその門弟北条時鄰が注釈したものである。文政七年の刊行である。朝日古典全書本がこの本文によっている。

4 群書類従所収本「いさよひの日記」

本校本は、内外書籍株式会社発行（昭和十四年五月十五日再版）の活字本「新校羣書類従 卷第三百二十二 紀行部 六 いさよひの日記」を対校本とした。この本は奥書に「右十六夜日記以岡山少将光政朝臣筆本書写以夫木抄扶桑拾葉集及他本校合畢」とある。

5 内閣文庫蔵 林羅山旧蔵本「十六夜日記」 一冊

縦二十六糎、横十九糎の袋綴の写本で、茶色の表紙の左肩に「十六夜日記」と外題を記している。内題は「いさよひの日記」とあり、墨付三十丁で、一葉は十一行、和歌は初めは改行しあとはそのまま、続けてある。本文の巻頭には「日本政府図書」の外、「林氏蔵書」「浅草文庫」「江雲渭樹」の印があり、巻末にも「昌平坂学問所」の印記がある。「江雲渭樹」の蔵書印からみて、林羅山旧蔵本である。

6 島原侯松平文庫蔵本「十六夜記」 一冊

縦二十七・三糎、横二十二・二糎の袋綴の写本で、雷文つなぎ牡丹唐草文様が空押しされた紺色の表紙の左肩に「十六夜記」と外題を記す。内題はなく、遊紙は前後各一枚、墨付三十丁で、一面に十行、和歌は行をかえて一行に記している。十五丁裏三行で旅行記が終り二行において「安嘉門院四条（名作）と記し、十六丁表に「中院大納言置文和歌 日吉百ヶ日参籠之時日歌之内也」を二行に書き、つづいて「いとはるゝななきいのちのつれなくてなをなからへは子は

いかにせん」と「ふる里に千世もとまてはおもはずとみのいのちをとふ人もかな」の歌を記し、その裏から鎌倉滞在の記事を書いている。巻末に「尚舍源忠房」と「文庫」の印が捺されている。蔵書家で聞えた島原侯松平忠房の所持本である。次の九条家旧蔵本と同系類似の本文をもつ唯一の本で、なお長歌以下の本文をも持っている。ただこの長歌以下の本文は、他系統の本からの写し加えてはないかと思われる。奥書その他伝来の事情を示すものはない。

7 天理図書館蔵 九条家旧蔵本「阿仏記」一冊

縦二十二・七糎、横十五・五糎の綴葉装の写本で、表紙の左肩に「阿仏記并為家追善作」と外題を記している。ただ「阿仏記」は「阿仏飯」とかき「飯」を見せ消ちにして「記」としている。すでに佐々木信綱博士御所蔵の頃玉井幸助博士によって紹介され、岩波文庫に翻刻されている本である。墨付五十九丁、白一で一葉に八行、和歌は行をあらためて二行に書いている。旅行記が終った所で、その裏白、次の表に「安嘉門院四条^{阿仏法名作}」と記し、裏白、次に「中院大納言置文和歌云々」(校異参照)とあるなどの外、本文も特異な本文をもち、更に長歌以下の本文を特たない点などで、大いに注目された本である。鎌倉滞在記が「かよふらしみやこの外の……」の歌で終り、その裏に「安嘉門院四条^{阿仏法名作}東日記」と書き、これで十六夜日記は終って、続けて「仮名諷誦」を書いてあり、巻末に一冊全体の奥書とも見えるようにして「以冷泉大納言 持為卿 家本書写校合了」とある。室町末期の写しと言われる。

8 広島大学蔵(甲)本(寛永十八年写本) 一冊

縦二十四・五糎、横十七・四糎の袋綴の写本で、表紙は薄空色で、その左肩に題簽があったと思われるが、現在は破損してなく、又内題もない。墨付三十五丁で、一葉に十行、和歌は行を改めて二行に書いている。遊紙はない。奥書は「此本所々雖有誤如正本 不違一字令書写畢并遂 校合者也 千時寛永十八年 林鐘中旬」とある。寛永十八年写しの写本である。

9 万治二年板本「いさよひの日記」二冊

縦二十二・一糎、横十五・五糎の上・下二冊よりなる袋綴の板本である。紺色の表紙の左肩に白地の紙で、上は「いさよひのにき 上」下は「十六夜日記 下」と外題を記し、内題は「いさよひの日記」とある。一葉十行で四十九丁。上が十八丁で十九丁より以下が下となっている。和歌は行をあらためて二行になっていて、挿絵が四葉はいつている。卷末に「万治二年夏中旬 洛陽今出川 林和泉板行」の刊記がある。

10 学習院大学蔵本「不知夜日記」一冊

縦十五糎、横十・九糎の綴葉装の写本である。三つ鱗文様の錦織の表紙の中央に、白地絹に「不知夜日記」と外題を記し、内題はない。墨付四十九丁で遊紙は前に一葉、後に三葉、一葉は九行で、和歌は行をあらためて二行に書いている。奥書その他伝来の事情を示すものはない。四十九丁表五行までで「四条と申もこの阿仏房の事為相卿の母也」と阿仏尼についての注記が終り、その裏に「新勅撰集卷第十七雜歌二題しらす 平泰時 世間に麻は跡なく成にけり心のまゝの逢のみして」と本文と一筆で新勅撰の歌を記している。慶長頃の写しという。

11 天理図書館蔵 竹柏園旧蔵本「いさよひの日記」一冊

縦二十六・七糎、横十九・五糎の袋綴の写本で、表紙の左肩に外題を「いさよひの日記」と記し、内題はない。巻頭に「竹柏園文庫」と「天理図書館」の蔵書印がある。墨付三十一丁、遊紙は前に一、後に二、一葉に十一行を書き、和歌は行を改めて二行に書いている。卷末に「宝永四亥梅雨月上浣日誌之畢 集月堂瓢水」とある。本文は万治二年板本と酷似した本文をもっている。

12 (静嘉堂文庫蔵) 古活字本「いさよひの日記」一冊

縦二十七糎、横十八糎の袋綴で、白と空色の模様の表紙の左肩に「いさよひの日記」と外題を記し、内題も同じく「いさよひの日記」とある。一葉十一行書きで三十四丁あるが、四丁裏から約一丁分の脱落がある所を、群書類従本

の本文と思われる文を別紙で補ない上部に貼付してある。但しこの貼付は静嘉堂文庫蔵本に限ってのことである。三十三丁裏五行で「新勅撰に入て侍し」の文が終り、次六行分白で、三十四丁表の一行目に「永仁六年三月一日書之」と記し、続けて二行目から「此あふつはうと申人は……」の注記の文を記している。元和頃の刊といわれる板本である。

13 静嘉堂文庫蔵 松井簡治旧蔵本「伊佐膏記」 一冊

縦二十二・五糎、横二十糎の枅型本の写本で、茶色の表紙の中央に「伊佐膏記」と外題を記し、内題はない。袋綴の写本で、墨付三十九丁、始めから三十六丁の表までで十六夜日記が終り、その裏から「阿仏房のかなふしゆ」と内題をかいて、それから三十九丁裏まで「かなふしゆ」が書かれている。一葉十二行で和歌は行を改めて二行に書いている。松井簡治博士の旧蔵本である。

14 東京大学蔵 伝池田光政筆本「阿仏十六夜日記」 一冊

縦二十五・九糎、横十九・四の袋綴の写本で、薄縹色の表紙の左肩に「阿仏十六夜日記 全」と外題を記し、その題簽の右側下半部に「吉備少将光政卿御写本」と小さく書かれている。墨付二十二丁で、一葉は十二行書き、和歌は改行して一行に書いている。残月抄本や群書類従本に岡山少将光政朝臣自筆本として対校本に用いられている本である。この本は巻末に光政卿筆本と見極めさせた次第を次のように記している。「(前略)……古き書さまなれば古筆に見極めさせてむとて古筆かりもてゆきて見せるにいとめつらかにおもしろき人の筆なりと聞えけるまゝさらは其名しるしてよとこひければこはまきれもなき新太郎光政少将の筆なりとて一ひらの紙にそのよしかひつ_ひけておこせけるを……」とあり、終りに「交市庵のあるしのりふみしるす」とある。

巻頭や巻末に三枝文庫、原宿文庫、南葵文庫などの印記があるが、明治四十四年十一月一日片野義雄氏が南葵文庫に寄贈した旨の記録が巻末にある。この南葵文庫の片野本というのは、明治四十二年になくなった美術学者片野四郎

氏の所蔵本であったものという。

15 慶応義塾蔵本「以佐臂能記」一冊

縦二十六・八糎、横二十・六糎の袋綴の写本で、鼠色の表紙の左肩に「以佐臂能記」と外題を記し、内題はない。墨付は三十四丁で、うち十六夜日記は三十一丁の二行までで終り、次に一行だけおいて、「阿仏房のかな諷誦」と内題をかゝげ、その本文を続けている。ただしこの仮名諷誦は「……法花経一部」で終り、「無量義経……」以下の本文はない。一葉に十二行を書き、和歌は改行して二行に書いている。巻末に「寛永寅九月尽 玄的判」とあるが、この奥書の寛永三年よりやゝ後の写しと推定される。なお巻末に慶応義塾図書館の蔵書印の外、「鷹司蔵書記」「刀水書屋所蔵圖書記」の印記をもつ。刀水は蔵書家、人物研究家として知られた故陸軍中将渡辺金造氏の号である。

16 宮内庁書陵部蔵 伏見宮本「かへのうち」一冊

縦十六・二糎、横二十二糎の袋綴の写本で、空色の表紙の中央に「かへのうち」と外題を記し、一枚目には内題のようにその左端に「むかしかへの中より」と記し、その裏白、二丁目から本文を書いている。墨付三十三丁、一葉に十四行を、和歌は改行して二行に書いている。「函号 伏 三十二」の写本で、巻頭に図書寮の印記があるほか、奥書その他伝来の事情を示すものはない。

17 内閣文庫蔵本「不知夜記」一冊

縦二十五糎、横十九糎の袋綴の写本で、紺色の表紙の左肩に「不知夜記」と外題を記し内題はない。墨付三十七丁、一葉に十行を書き、和歌は行を改めて二行に書いている。巻頭と巻末に「日本政府図書」の蔵書印があるのみで、他に奥書などもない。四丁の裏に、約一丁分の脱落と思われる部分がある。この脱落は、廣大甲本、林羅山本、古活字本、鷹司乙本と同じ箇所脱落である。

18 静嘉堂文庫蔵 松井簡治旧蔵 鈴木弘恭自筆書入本「阿仏房紀行」一冊

縦二十七糎、横二十糎の袋綴の写本で、薄茶色の表紙の左肩に「阿仏房紀行 全」と外題を記し、内題はない。墨付四十丁、一葉に九行を書き、和歌は二行に書いている。前の遊紙には、残月抄よりの抄録を、後の遊紙には冷泉本にある「阿仏房のかな諷誦」の本文を書きこんでいる。これらは鈴木弘恭による書き入れである。本文には、万治版本冷泉家蔵本の外残月抄本などとの校異が書き入れられ、上段には残月抄の注などによる語の解説をかかげている。

本文の巻末には「仮名遣大概相改奥書共正本之マヽニ書写之」とかき「うつりゆくひのくま河の流はやうして年はふれともおろかさは云々」とあり「元禄十五壬午年中秋書 高之」として、更に「高之のうつりゆくひのくま川の流云々」とあり、「かきあつむ和歌の浦ちの藻塩くさ分行道の露のしるへに 矩豊書」とかき、最後に「明和八年写しの本と思われる。仲冬」とある。和歌二首を含めて奥書に二面をあてているが、明和八年写しの本と思われる。

19 扶桑拾葉集十二所収本「いさよひの記」

扶桑拾葉集十二、四十一丁から七十三丁までの三十三丁があてられている。内題「いさよひの記」とあり、一葉十行書き、和歌は行をあらためて二行に書いている。巻末は「新勅撰に入て侍し」の本文で終り、他本にある「永仁六年三月一日書之 この阿仏云々」の本文はない。

20 宮内庁書陵部蔵本「いさよひ日記」一冊

縦十六・二糎、横十六・五糎の樹形綴葉装の「函号一五五・四六」の写本である。植物をえがいた表紙の中央に「いさよひ日記」と外題を記し、見返は金で、内題はない。墨付四十二丁で遊紙が前に一、後に三枚ある。一葉十行を書き、和歌は初め改行してあとはそのまま続いている。巻末は「永仁六年三月一日書之 何仏」で終わっている。巻頭に図書寮の印記がある外、奥書などはない。

21 宮内庁書陵部蔵 鷹司甲本「不知霄之記」

縦二十七・五糎、横二十糎の「函号 鷹四四三」の袋綴の写本である。「雅章吉野之記」「新歌集記」との合綴本で、薄緑の表紙の中央に「雅章吉野之記・不知霄之記・新歌集」を並べて外題としている。内題も「不知霄之記」とあり、一葉に十五行を書き、和歌は改行して二行に書いている。江戸初期の写しというが、特に奥書などはない。

22 宮内庁書陵部蔵 鷹司乙本「いさよひの記」

縦二十七・五糎、横二十糎の「函号 二六六 三八五」の袋綴の写本で、21と同じく鷹司本である。これも「寝覚の和歌・松島の記・いさよひの記・身延の記・帰来日記」の合綴本で、薄緑の表紙に右の書名を並べて外題としている。内題は「十六夜記」とあり、一葉に十一行、墨付三十丁、和歌は二行に改めて書いている。奥書その他特記すべきものはないが巻末、「此あふつはうと申人は……中略……ためすけのはくなり」で終ったあと、更に四、五行分あけて「此いさよひの日記は阿仏尼の著述なり安嘉門院の宮仕へし四条と申せし女にて権中納言藤原定家の卿の子中院大納言為家卿の室なり為家卒去のち預地播州細川の庄を嫡子為氏次男為相へわち預すへきよし言をかれしを為氏押領し云々」の記がある。

23 尊経閣文庫蔵 中院通勝筆本 一卷

菊を織りこんだ布表紙の卷子本で、外題、内題ともにない。一行に大体三十字前後を書き、和歌も一行に書いている。本校本の底本永青文庫本「いさよひの日記」を中院通勝が、慶長三年十一月に写したもので、次のような奥書がある。

此道之記始而一覽之次則借請書写訖是所「雇兼如法師之筆也遂勘校之後以他本」重而読合之者也「慶長第三曆孟冬廿九日

幽斎史玄旨 判

以右本去廿九日夜於灯下三四丁書之自曉至朝候又書」為加表紙被乞返之同今朝借請之写終書切之「慶長三年十一

月朔

也足子(花押)

24 広島大学蔵(乙本)「いさよひの記」一冊

縦二十七・八糎、横二十・一糎の袋綴の写本で、表紙の左肩に「いさよひの記 全」と外題を記し、内題も「いさよひの記」とある。本文は、19の「扶桑拾葉集本」の写しで、丁うつり、行、文字もすべてこの扶桑拾葉集と同じである。巻頭に「広島大学図書之印」の印記がある外、奥書などはない。本文に朱引きがある点が扶桑拾葉集本と異なるだけで、他は全く同じである。

25 長崎県立図書館蔵 三宅文庫本「十六夜日記」一冊

縦二十四糎、横十六糎の袋綴の写本で、外題は「十六夜日記 全」と記し、内題も「十六夜日記」とある。本文は二十八丁、一葉に九行を書き、和歌は行を改めて一行に書いている。長崎県南高来郡南有馬町の三宅家旧蔵の本である。本文の前に「十六夜日記 解題」として、阿仏尼、家柄、鎌倉下りの次第などを書き、最後に「此書の注釈は北条時鄰の物したる十六夜日記残月鈔をよしとす」と述べている。諸本中最も写しの新しい本である。

26 宮内庁書陵部蔵 黒川本「異本十六夜日記」一冊

図書寮「函号 黒 一二八」の写本で、表紙の左肩に「異本十六夜日記」と外題を記す。内題は「阿仏道行」とあり、墨付三十四丁、一葉に十行を書き、和歌は初めだけ改行し、あとはそのまま続けている。巻頭に図書寮の印の外、黒川真道蔵書などと黒川家旧蔵である事を示す蔵書印がある。巻末には「右異本十六夜記者以叔父 伊村所持之本書写之以 流布之本令校正畢 文政五壬午七月 随日園勝良」の奥書がある。本文は流布本に比ぶればいくらかの異文もあるが、特に異本という程のものではない。

27 岡山大学蔵 池田文庫本「いさよひのにつき」一冊

縦二十四・一糎、横十六・七糎の袋綴の写本で、焦茶色の表紙の左肩に黄色地の紙に「いさよひのにつき 全」と外

題を記し、内題も「いさよひの日記」とある。墨付四十六丁、一葉に九行を書き、和歌は行を改めて二行に書いている。本文は誤字の多い本で、所々判読出来なかったのか、空白にした所もある。その誤字や空白に朱で訂正、補入がなされている。この校本では他本では朱の訂正本文などは全くとることをしなかったが、この本だけは、訂正本文をとらねば意味がないので、訂正本文をとった。本文は万治板本の写しと思われる。巻頭に「岡山大学図書」「本池田家蔵書」の印記がある。奥書などはない。

28 天理図書館蔵 竹柏園旧蔵本「道の記」 一冊

縦二十三・六糎、横十七・六糎の綴葉装の写本である。紺紙金泥流水に柳の模様の表紙の左肩に赤地に金泥雲形模様の紙に「道の記 阿仏」と外題を記している。内題はなく、墨付三十九丁、一葉に十行を書き、和歌は二行に書いている。巻末に「右はあふつのかまくらへの羈行」の識語があるだけで、奥書などはない。江戸中期の写しであるという。

29 天理図書館蔵 平瀬本「十六夜日記」 一冊

縦二十四糎、横十七糎の袋綴の紺表紙の写本、題簽は左肩、菊唐草雲母模様。「十六夜日記」と記す。見返に「平瀬本 千種文庫蔵 墨付三十七丁」と識されている。内題はなく、巻頭、天理図書館の蔵書印の外、「残花書屋」「宝玲文庫」などの印記がある。一葉十行を書き、和歌は二行に書いている。本文は「永仁六年三月一日書之」で終わっているが、これまでが江戸初期の写しと思われる。巻末に「古活字本より写す 昭和十六年六月八日 云々」という戸川氏の識語があるが、古活字本より転写したのは、「此あふつはうと申人は……」以下の九行、この部分だけは本文と別筆である。